# 牧師の娘　イザベラ・バード

大　野　純　子



## はじめに

イザベラ・バードはヴィクトリア朝の始まる 6 年前の 1831 年に国教会牧師の娘として生まれた。当時、この「教会」は政治に深く関わり、行政の一端も担っていた。したがって牧師とその家族は、担当教区の公的な立場にあった。この時代に牧師の娘として生まれれば、義務もあったが、その代わりに特権もあった。本稿はヴィクトリア朝初期から中期にかけての牧師の娘のありようについて述べ、バードが牧師の娘であることがその人格形成にどのように影響を与えたかを見たものである。呼称については「バード」と呼ぶのを基準にして、家族に関する言及があるときはファースト・ネームの「イザベラ」を用いた。バード著『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳注の完訳版 1 ～ 4 巻を用い、引用部分の巻数、ページは「完 3―21」のように記した。原著は 1880 年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。

## 1．ヴィクトリア朝の時代区分と階級

### 1．1　時代区分と階級

バードが少女時代を過ごしたヴィクトリア朝初期は、産業革命の活気が残り、世の中がめまぐるしく変化したときだった。中期は 1851 年の第 1 回ロンドン万博からで、英国の最盛期に当たる。後期は 1870 年代からとするのが一般的である。この時期も英国の繁栄は続いていたものの、知的財産保護がないために英国の先進技術が欧米に簡単に広まり、英国の優位性が薄

まった。英国にとってアメリカの発展成長はめざましくもあり、不快でもあったが、伝統のなさを笑うことしかできなくなっていった。

ヴィクトリア朝時代の英国民について語るとき、まず、大前提となるものは階級である。上からアッパー、ミドル、ロウアーと三つに分けられる。「ミドル」といわれる条件の一つは使用人がいることである。アッパーとミドルクラスは合わせても人口全体の 2 割程度だった。中期になると経済の好況によってミドルクラスの厚みが増したので、このクラスを細分化し、上から「アッパーミドル」「ミドルミドル」「ロウアーミドル」と 3 段階に分けることが一般的になってきた。一番下のロウアーミドルがミドルクラスの 2/3 を占めていた。

### 1．2　牧師の家の階級とバード家の場合

牧師の家の階級は、牧師の職階によっても違いがあるが、一般的に収入面からはロウアーミドルクラスか、その下のロウアークラスに位置した。しかし、職業的にはミドルクラスに入るとされていた。牧師一家にとってアッパークラスとの接触は、自分の担当する教区の領主や有力者との付き合いだ。ロウアークラスとの接触は、教区によって事情がかなり異なる。ヴィクトリア朝中期のロウアークラスの人で、毎週きちんと礼拝に訪れる人は決して多くなかった。牧師は自分の担当する教区の貧しい人々に慈善事業を施し、教会に来るように仕向けた。

バードは父方、母方ともにアッパーミドルの出身だと言われている。両家とも聖職者を何人も出している家柄で、堅実であり派手さはない。父エドワードは大学卒業後にインドで法廷弁護士をしていた。そこで最初の妻と子どもを病気で失い、帰国して 38 歳で牧師になった。再婚して生まれたのがイザベラとその妹ヘンリエッタである。法廷弁護士ならアッパーの職業としても認められるものだが、牧師としてはインドで働いていたことがマイナス要因になり得る。

ネイボッブ（nabob）という言葉がある。これはインドで成功し、帰国した英国商人を指す言葉で、どちらかと言えば否定的に用いられる。インドで儲けて帰ってきた人をうらやむ気持ちが、大衆の中にあったことは確かなの

で、牧師がかつて「ネイボッブ」だったと決めつけ、いい印象を持たない教区民もいたかもしれない。



## 2．ヴィクトリアン女性のあるべき姿

### 2．1　娘をどのように教育すべきか

ミドル以上のクラスでは娘の教育もまた、ピューリタン的な発想と深く結びついていた。「男性を太陽に、女性を月に喩える」その発想から、娘を「よりよい月」に仕立てあげることが親の務めであった。以下は 1880 年に出された少女向けの雑誌の引用である。この時期はヴィクトリア朝後期にあたるが、内容は中期と変わらない。

> いつもにこやかで、決して怒らず、上品な言葉と物腰で、働き者で誠実で、柔軟な心を持ち、従順で信頼できるほがらかな少女、決して人に迷惑はかけず、有能で堅実で知識欲にあふれる少女。そんな少女であれば、成長してからすばらしい女性になれる。（川端 2019 p.95）

少女への具体的しつけとしては、「体をできるだけ衣服で覆うこと」「体の部分がもつ名称や機能を直接口にするのを避けること」「手足の動きや声を常に抑え気味にして、周りの注意を引くことがないようにすること」が求められた。「身を慎む」ことがもっとも重要だった。少女たちにまず読ませるべき本は、宗教書と、貞淑な女性になるためのしつけの本だ。学業科目は、フランス語、英語の綴りを正しく書く正字法、音楽、絵を描くこと、社交ダンス、手芸等であった。

### 2．2　慎まなければいけないことばかり
### ― 何をしてもいいか、何をしてはいけないか

この時代、女性は結婚したら「家庭の天使」と言われることが理想であった。「家庭の天使」とは夫に従順で、常に受け身で控えめで、家庭を守ることを第一に考える存在である。ここまでは他国でもありそうなことだが、当時の英国では、夫が俗悪な世間で毎日戦い、帰宅したときに妻が彼を清め、慰め

ることが期待されていた。また、これらのことを全部こなした上なら、外に出て宗教活動、慈善活動をすることはむしろ奨励された。

女性が何かを学びたいという気持ちを持つなら、分野には充分気をつける必要があった。政治や学問上の最新の理論は論外だった。教養のための読書として、理論付けが不必要とされる「自伝」や「旅行記」を読むことは差し支えなかった。また、当時、植物は性に関係がないと思われていたので、植物に興味を持つことはよいことであったが、動物は性の問題が出てくるので避けるべきであった。

また、女性が手紙や日記以上の書き物をするのはあまり喜ばれない傾向があった。バードより約 50 年前に生まれた女性作家ジェイン・オースティンは、小説を書いているとき、いつも作りかけの手芸品をテーブルの上に置いていたという。人が来たとき、とっさに原稿を隠すためである。女性作家は存在したが、男性の偽名を使って作品を発表することもあった。

### 2．3 「余った女（surplus women）」と　病気になる娘たち

「家庭の天使」になるには、まず結婚をしなくてはならない。ところが、英国では近世から女性の人口が、男性の人口をかなり上回っていた。その理由は特定できないが、ヴィクトリア朝時代になると男性の海外移住者が一定数いたことも理由の一つだろう。経済的に困らず、生活のための結婚をしなくてよい女性なら、ただ、そのまま実家に居続ければよかったが、一生、父か兄に従う必要があった。

しかし実際は、自活していかざるを得ない女性が多い。ヴィクトリア朝初期にはミドルクラス以上の女性が生活していくためにつける職業は、ほんのわずかしかなかった。教師はその一つだ。フローレンス・ナイチンゲールが職業としての看護師の道を開いたのは、ヴィクトリア朝中期になってからである。彼女たちは「家庭の外の天使」になることができた。

『家族の命運』という本に、この時期の典型的な例があげられている。裕福な商人の家に生まれた男女の双子がいた。男の子は十代後半で、家業である材木業の経営者の一人になった。女の子はずっと家にいて、植物学に興味を持ったが、それを発展させることもなく、後に神経症になり、一生を病人と

して暮らした（p.239）。社会的抑圧のため、精神的に病んだ女性の典型である。

## 3．二人のイザベラ

### 3．1　共通点と異同点

「イザベラ」という名と、そのヴァリエーションはヨーロッパに広がっていて、英国内では一般に英語的なイザベラ（Isabella）と、フランス語的なイザベル（Isabelle）という名が見られる。英国国家統計局の統計によると、「イザベラ」は 2020 年にイングランド・ウェールズで生まれた女児の名前で 8 番目に多い。ヴィクトリア朝時代にも、このありふれた名前を持つ女性が多く存在していた。ここでは、イザベラ・バードと好対照を見せている同時代のイザベラとして、「イザベラ・M・ビートン」をとりあげたい。同名の煩を避けるため、彼女たちをそれぞれ、結婚後の改姓には関わりなく、「バード」「ビートン夫人」と表記する。バードの人生は長く、ビートン夫人の人生は短かった。バードは海外で活躍し、ビートン夫人は国内で活躍した。バードは結婚によって一時期、不自由になったが、ビートン夫人は結婚によって人生の選択肢を増やした。図表 1 は二人の外的な比較である。

図表 1：二人のイザベラの比較

| | バード（イザベラ・L・バード） | ビートン夫人（イザベラ・M・ビートン） |
|---|---|---|
| 生年 | 1831 | 1836 |
| 没年 | 1904（72 歳） | 1865（28 歳） |
| 居住地<br>海外渡航歴 | イングランド生まれ、父親の教区転任で移動、外国長期旅行多数回 | ロンドン生まれ→結婚でロンドン郊外に住む<br>留学、外国旅行 |
| 社会階層 | アッパーミドル | 実父（ロウアーミドル）<br>→養父（アッパーミドル）<br>→夫（ミドルミドル） |
| 父親の職業 | 国教会牧師 | 実父リネン商、ビートン夫人 5 歳の時に死亡<br>養父ドーリング氏。印刷業 |
| 兄弟姉妹 | 二人姉妹の長女 | 実兄弟と異母兄弟で総勢 21 人の長女的存在 |
| 学歴 | なし。母親について学ぶ | ロンドン近くの寄宿学校を終え、留学。独ハイデルベルクの寄宿学校で仏独語、ピアノなどを学ぶ |
| 結婚 | 1881 年（本人 49 歳、夫ジョン約 10 歳年下） | 1856 年（本人 20 歳、夫サミュエル 25 歳） |
| 子ども | なし | 4 人（うち 2 人は乳幼児期に死亡） |
| 職業 | 著述業（旅行作家） | 編集者、著述業 |
| 出版物 | 1856『英国女性の見たアメリカ』他多数 | 1861『ビートン社の家政書 [1)]』他 |

生年ではバードはビートン夫人より5歳年長だが、同世代と言える。職業は共に著述業である。二人にとって幸運だったのは、報酬や著作権に関して男性の搾取や嫉妬がなかったことだ。バードはマレー社の社長ジョン・マレー3世から長年の支援を得ていた。ビートン夫人は夫が出版社を経営していて、その雑誌にコラムを書き始めたことがキャリアのスタートになった。

二人のイザベラは幼いときから聡明であり、読書量も多かった。二人が少女時代を過ごしたヴィクトリア朝初期から識字率は大幅に上がり、貸本業の充実で読書の習慣が広まった。やがて安価な本も出回り、今まで貴族の家にしかなかった本が、やがて庶民の家にも置かれるようになった。自分自身の狭い世界を生きるのに役に立とうが立つまいが、人々は向上心を持って本から何事かを学び取ろうとした。彼女たちが本で多くを学ぶことができたのも、また著述で世に出られたのも、そのような時代背景があったからだ。

### 3.2　イザベラ・バードの結婚と著書

バードは独身時代が長かったので、当時の多くの既婚女性のように、出産に伴う死などの女性ゆえの命の危機には遭わなかった。本人が望まず、また食べていくための結婚をしなくてもよいのなら、積極的「余った女」の道を選ぶことも選択の一つである。しかしバードは1881年に49歳で、周囲の人も意外と感じる結婚をした。夫となったジョン・ビショップはバードの妹ヘンリエッタの主治医であり、内向的な妹が密かに慕う相手だった。ところが彼は数年にわたり、強い姉に惹かれていた。妹は後で姉からジョンとの婚約を聞いて非常にショックを受け、生きる気力をなくしたところにチフスに罹り、1880年に亡くなった。バードはその辛い死を認めながら、彼女なりにジョンを愛することになって最終的には結婚を承諾したのである。だから彼女はたった一人の家族が亡くなった淋しさゆえの結婚をしたわけでもないし、数年来のジョンの愛情を断り切れずに押されて結婚をしたわけでもない。彼女はすでに旅行作家として知られていたバードという姓を捨て、結婚後は「イザベラ・ビショップ」と名乗る覚悟を見せた。

結婚約5年後に夫は病死した。もし、彼が丈夫で長生きしたら、バードのキャリア人生は結婚の時点で断ち切られた可能性がある。バードは1877

年に遡る仮の婚約時に「私にとって変化が必要になった場合には、外国の旅に出ることを黙認する」という条件を婚約者から取りつけたというが、これまで通り、いつ帰国するかわからない旅行を好きなだけ続けられると思い込んでいたのだろうか。バードは病身の夫と共に気候のよい南フランスで転地を繰り返した。「旅をすることが生きること」になっているバードにとって、これは当然真の旅ではない。彼女自身も、英国にいるときと同様に病気がちになった。

バードは夫を失った後、悲しみにくれながらも旅を再開し、その後は進んでより過酷な旅行をした。しばらくして彼女は完全に自分の世界に戻った。著した旅行記が読者に何を与えるかは、受け取り手任せであった。彼女の著書が影響を与えたのはどちらかというとミドルミドルクラス以上の男性が中心である。一代で財を成した男性を self-made man という。その言葉を借りるなら、バードは学校教育こそ受けていないが、self-made woman として自分の知的財産を築いたと言える。

### 3.3　イザベラ・ビートンの結婚と著書

『ビートン社の家政書（Beeton's Book of Household Management）』は実務的な家政本で、これまでの類書の集大成であるとともに、使いやすさへの工夫が凝らされていた。1861 年の初版刊行時に 6 万部を売り上げ、後にミリオン・セラーとなっている。この本でビートン夫人が目指したのはミドルクラスの女性の人生の充実である。彼女の名は家政書のアイコンとなり、夫人の死後も脈々と出版され続けている。彼女が持っていた文学的才能は、開明的な考えを持つ夫サミュエルと結婚することによって花開いた。夫は出版社の経営者として時代を見る才能に優れていた。

膨大な料理のレシピは読者や知人から寄せられたものを整理したものである。夫人の個性はどちらかというと、料理以外の面に現れている。夫人はフローレンス・ナイチンゲールの看護に関する主張に強く賛同していたので、その著書の内容を積極的に紹介し、結果的にナイチンゲールの提案が病院や軍だけでなく、各家庭に入り込んだ。また、この家政書には化学薬品の名前や、家計に関する金額の例示が次々と出てくる。記述には法律や医学の専門

家の手も借りているが、まず著者・編集者である夫人自身に科学や経済に関する知識がなくては書けないものであった。

ビートン夫人は読者に人生の指針、信条を語るときでさえ、神の名を口にしない。これは夫サミュエルの影響であろう。夫はこのクラスにしては珍しく、日曜日に教会に行かない人間だった。これは夫人の実家から見て不快なことで、養父ドーリング氏は大事な長女が、自分の家より格の落ちるミドルミドルであること、婿が教会に通わない非常識な人間であること、なおかつ、妻を働かせることを恥と思うヴィクトリア朝紳士の価値観から外れていることから、この結婚について終始、よい感情を持っていなかった。そのため、なおさら夫人は結婚して幸せにならなくてはいけなかった。

幼少時からキリスト教信者としての生活が身についている夫人は、結局は読者を当時のキリスト教福音主義者の目指す人間の生き方――清潔、勤勉、高潔に導こうとした。また、収入の多寡に関係なく自分にできる慈善活動をすること、慈善は人のためではなく実は自分のためにするものだと説いた。さらに夫人は、慈善活動を通じて女性の社会的地位が上がることを期待していたと思われる。夫人は結婚後は教会に通わなくなったのだろうが、まるで在野の牧師であるかのように女性の生活と精神を向上させようとした。

この夫婦は両人とも「保守的で伝統的な生活における夫と妻の本分を守りながら、それぞれの役目を果たすのがベストである」と考えていた。ところが実際は、夫人は三番目の子どもを出産した後に乳母に子どもの養育をほぼ任せることにして、毎朝夫婦で鉄道または馬車でオフィスに通ったのである。これは女性にとって非常に負担が大きい。着替え一つとっても、現代の人間には想像がつかないほど手間がかかるし、乳母やメイドがいても指示は出さなくてはいけない。帰りはどうしていたのか不明だが、夫の帰宅がいつも遅かったことは知られている。ヴィクトリア朝中期に女性が毎日一人で鉄道に乗り、通勤することは少なくとも常識外だった。自家用馬車ならその点、気が楽だったと思われる。夫人は結婚前はふくよかな体型だったが、仕事の忙しさから痩せてしまったらしい。

夫人は過去の履歴から特に病身とは思われない。夫人の才能に夫も世間も期待し、夫人自身も編集者の穴埋めの仕事から、本格的な仕事を志向していっ

たことがうかがえる。第 4 子出産の 1 週間後に亡くなった夫人の死因は産褥熱と言われているが、夫からうつされた梅毒が夫人と、そして乳幼児期に死亡した第 1 子・2 子の死因、数回の流産の原因とみる説もある（Hughes 2005）。ヴィクトリア朝時代、新婚の妻が夫から性病をうつされること、妻が度重なる妊娠・出産のために体力を吸い取られ、ついには命を落とすことは、階級の上下を問わず非常に多く見られた事例である。

### 3．4　フェミニズムと二人のイザベラ

1840 年代に牧師の妻であるサラ（セーラ）・S・エリス（1799 生）が世に出した 3 冊の本、『イングランドの女性たち：その社会的義務と家庭の習慣』（1843）、『イングランドの妻たち、その相対的義務、家庭内の影響力、社会的責務』（1843）、『イングランドの娘たち：社会におけるその位置、性格、責任』（1844）、『イングランドの母たち：その影響力と責任』（1844）はその堅苦しい副題からも見てとれるように、女性に男性への服従を説いている。聖パウロの言葉によれば、男性は神によって造られ、女性はその後、男性の助け手となるように、男性のあばら骨から造られた。エリス夫人は、聖書の教えに基づき、現代（ヴィクトリア朝）女性が目指すべき生き方を教えたのである。ミドルクラスの女性たちは喜んでこれらの本を読み、自分の人生をいかに夫に捧げるべきかを学んだ。

エリス夫人より 37 年後に生まれたビートン夫人も、同様の枠の中でミドルクラスの女性が実際にどう行動すべきかを教えている。夫人は著書の第一章冒頭に「家の女主人は軍隊の指揮官であり、企業でいうなら指導者である」という文を勇ましく掲げている（Beeton 1861　文章番号 1）。家事を合理的に行うために、最新の科学的知識を理解し、実践、応用ができるようになった女性、そして、使用人も含む家内の人間関係をうまく切り回し、社会との接点である慈善活動に役立つ既婚女性は、家庭の外に出てもそのまま有用な人材になるだろう。この第一の好例がビートン夫人自身である。サミュエルの経営する S.O. ビートン社はこれまで数々のヒット作を出してきたが、夫人の才能は夫の会社にとってもはや欠かせないものだった。読者の女性たちは、さまざまな立場でこの家政書を読み、これまでより聡明になった。

一方、バードにとって、女性の地位向上や変革は本人の第一の目的ではない。彼女はあくまでも自分の人生の充実のためにキャリアを築いていったのである。その結果として、若い女性が個人的に勇気づけられたということはおおいにあり得ただろう。しかし、バードも一人の女性として英国内で少しずつ起こっているフェミニズムの風潮を感じていなかったわけではない。彼女は友人宛の手紙で『日本奥地紀行』の好評について「女性がやりたいことを精一杯やって成功したということは、女性の権利を主張するうえで多少の役に立ったのではないかと思っています（バー　2013　p.288）」と述べている。

ビートン夫人がミドルクラスの若い世代の女性たちを直接応援したのに対し、バードは世間、つまり男性に女性の実力を示し、間接的に女性の応援をした。二人のイザベラは共に世間を怒らせなかった。しかし、彼女たちはたとえ知り合ったとしても気は合いそうにない。ビートン夫人は「家庭の天使」を作りたい保守派の代表的存在で、既婚婦人に自信を持った「家庭の天使」になることを教えたのだが、先に述べたように自らは家庭の中に収まりきれない才能を示してしまった。バードの方は女性の連携、フェミニズムの推進には見向きもせず、自分一人の自由と解放を求めているように見える。バードが旅行の準備中または旅行途上で頼るのは有力な男性であったため、彼らを不快にさせるのは得策ではなかったし、バード自身も保守的な女性のありようを崩したくなかった。彼女は 60 代に入る頃、それまでの旅行記の価値を認められ、1891 年に王立地理学会の特別会員に選出された。この時、風刺で知られるパンチ誌が「女たちは靴下を縫って[2] いればよいのだ」と抗議する男性たちを紹介している（東田 2004 p.40）。この時期、バードはヴィクトリア女王に拝謁する名誉を得たり、前後して英国での講演活動にも努めたが、これまでと同様に慎ましくしていた。

英国のフェミニストたちは長い間、川を逆流するような苦しい旅を続けていた。二人のイザベラはフェミニストから離れた立場にあったが、結局はそれぞれ異なる方法で、彼女たちの背中を押したのである。

### 3．5　共通の常識

バードはビートン夫人の書に特に魅力は感じなかっただろうし、夫人の方はバードの行動は理解できなかっただろう。価値観が何かと相反する二人だが、同時代を生きた人間として、事物に関しては共通する認識も当然持っている。ここでは、二人がともに非常に関心を抱いている医療に関する一例をあげる。

バードはキリスト教の宣教団が世界の各地で行っている「医療伝道」を評価していた。そのため、旅に出るときは自分のためだけでなく、困っている病人を助けるために医薬品を何種類か持参していた。「クロロダイン」はその一つであり、アヘンとクロロホルムを含有する。ヴィクトリア朝の人々は痛みに対して敏感であった。痛みを恐れるあまり、人々はアヘンが少量入った薬品を好み、それらは薬局で簡単に入手できた。クロロダインは英国薬学会の会長を務めたジョン・T・ダヴェンポートが、ジョン・C・ブラウン医師の処方によって製造したもので、咳、風邪、肺病、気管支炎、ぜんそくの症状を和らげるとされた。このような売薬は、病気の治療というより不快をごまかす作用しかなかった。日本ではオランダの軍医ポンペに医学を学んだ蘭方医佐藤尚中・松本良順がクロロダインと同様の薬を創製し、本町資生堂等から 1877（明治 10）年に「神薬」として売り出している。しかし、バードは少なくとも来日するまではそのことを知らなかったであろうから、彼女が使用したクロロダインは英国から大事に持参したものと思われる。

バードはこの薬を 2 回、日本の病人に与えている。まず最初は、新潟県のある宿の主人の息子である。バードは、ひどい咳で苦しんでいたこの子に関して「持参のクロロダインを 2､3 滴与えると咳はすっかりおさまった（完 1―212）」と記している。2 回目は北海道平取のアイヌであった。この時バードは緊張している。病人が老人で重病であったからである。集落の人々に頼まれてバードはこの女性の家に行き、「ひどい気管支炎にかかって（完 3―95）」いると判断している。そこで彼女は病人にクロロダインを少し与え､2､3 時間後にもう一度与えるようにと家に薬を置いて辞した。真夜中にまた使いの者が来て、病人の体が冷たくなってきたという。バードはここで何かをすると自分のせいで病人が死んだと言われかねないと思ったが、人々のたっ

ての依頼を受けて病家に再度出向いた。そして、白樺の樹皮を燃やしているわずかな光を頼りに、クロロダインを 25 滴、ブランデーと牛肉のスープを少量、苦労して病人の喉に流し込んだ。結果として病人は危機を脱し、快方に向かった。

医師でもないバードがこの薬を一日 3 回も投与し、しかも最後に 25 滴とは思いきったものである。ビートン夫人も当時の英国人として当然、このようなアヘン入り売薬の効果を認め、頼りにしていた。夫人の掲げる家庭薬リストには、アヘンの粉末とアヘンチンキの名があげられている（Beeton 1861　文章番号 2579）。これは、主婦やメイドが家庭内で目的に合った薬品を調合するためである。夫人はこれらの毒物の弊害も意識していて、万が一誤飲したときはどうすべきかも記している（同上　文章番号 2647）。また、乳母が勝手にアヘン入りシロップを子どもに与えないように注意する必要があるとも述べている（同上　文章番号 2443）。

## 4．牧師の娘

### 4．1　牧師館に期待されたこと

「はじめに」で述べたように国教会は行政の末端機関でもあった。たとえばヴィクトリア朝時代の前半まで、教区牧師と信者代表の教会委員は、教区内の道路、水道、衛生、娯楽などでかなりの権限を持っていた。貧しい人に衣服や食料、石炭を配給するのも、教会の大事な役目の一つだった。

牧師とその家族は教会に近い牧師館に住んだ。牧師館は教区のコミュニティセンターの役割も果たしていたので、牧師館には絶え間なく客があった。社交訪問に訪れる教区の有力者、上司にあたる主教をはじめとして、陳情に訪れる人、聖書勉強会に参加する若者、行事や慈善活動の打ち合わせに来る人、そしてたまには近隣の牧師も訪問した。さまざまな社会的地位の客が、同じ部屋にかち合って気まずい思いをしたりすることがないように、交通整理をするのは妻、または娘の役割だった。

国教会はカトリックの独身の神父との違いを見せつけるために、牧師一家が教区のモデル家庭になることを期待していた。息子たちは大きくなると神学校の寄宿舎に入るので頼れない。そのため牧師夫人と娘たちの活躍は重要で、彼女たちは「無給の半公人」と言える存在だった。たとえば、牧師夫人は頼まれれば無料で教区民に使用人の職の斡旋をした。牧師の妻とその娘たちは「出過ぎないように出る」必要があった。中には牧師である夫よりも、話がうまく、人を惹きつけられる妻もいた。女性たちの才能は隠さなくてはいけなかったが、非難されないように活かすことも必要だった。

牧師の妻、娘たちに共通に見られたのは、「神に選ばれて牧師の家族になった」というプライドと、それに伴うノーブレス・オブリージュの気持ちで、他人のために無私で尽くすという信条だ。そして多くの妻、娘は謙虚で、どんな成功も「神のおかげ」だと、よく口にした。

### 4.2　牧師の娘の権利と義務

娘たちは否応なしに年齢に合わせた家業の手伝いをしなくてはならなかった。彼女たちは 10 歳にならないうちから、牧師の主催する日曜学校で貧しい家の子どもたちに単語の綴りを教えたり、女の子には簡単な刺繍などを教えた。また、聖書の話を子どもにわかるように綴ったテキストを書いたりもした。英国の公教育は他のヨーロッパ諸国に比べてきわめて遅く、特に女子教育はその遅れが顕著だったので、無料で学べる日曜学校は非常に重要な場所だった。

娘たちは 10 代後半ともなると役割分担がもっと増えた。毎日手紙を書く用事だけでもかなり時間を取られる。訪れる客の相手をしたり、商人への支払と金銭の管理をしたりする。使用人の掃除をチェックし、コックと特別な客のディナーのメニューの相談もする。ある娘は父親から「石炭クラブ」と「衣類クラブ」の責任者を任された。

娘たちは母がしている教区民への就職の斡旋や、いざこざの仲裁などは年齢的にできなかったが、慈善音楽会、演劇会などのイベントではそれぞれが得意なことを活かしておおいに活躍した。美しい声で讃美歌を歌える娘、ピアノが弾ける娘、演劇の才能がある娘がいた。他にもイベントで集まった慈

善金の管理をすることなど、すべき用事は尽きなかった。

このようなイベントの際、娘が司会者のセリフや劇の台本を書くことも奨励された。大義名分があるので娘が書き物をしていても問題にはならなかったのである。その結果として、当時の女性作家・文筆家の中に牧師の娘が多くいたことは広く知られている。オースティンやブロンテ姉妹はもとより、それほどの知名度はないにしても、牧師の娘の文筆家は珍しくなかった。



## 5.「牧師の娘」イザベラ・バードの場合

### 5.1　両親の教育方針は不明確

バードの両親は娘二人を寄宿学校に行かせず、また家庭教師もつけず、母親が直接、教育に当たった。牧師は生活費節減のため、よくそうした。しかし、財産のあるバード家ではその必要はなかったはずだし、何よりも母親は牧師館の雑事に追われていたはずだ。それは二人とも虚弱な体質であったためだろう。寄宿舎での病気感染を恐れたのかもしれない。母親は娘たちに、当時の女性の学ぶべきことを一通りちゃんと教えた。父は特に姉イザベラには博物学関係のことも教えた。父親は再婚だから、娘たちと年の差は比較的開いていた。自分の亡き後、娘が家庭教師にならなくてもよいほどの財産があるので、それでよいと思ったのだろうか。

### 5.2　安息日問題

父エドワードは牧師という職業で成功したとは言えない。彼は安息日に関して、教区民との間で２度も問題を起こし、そのたびに教区を代わり、消耗していた。安息日とは休む日ではなく、祈る日である。朝、教会に行き、後は慈善活動をするか、あるいは家で祈ったりして、家族だけで静かに過ごす日だ。しかし、７日のうち、丸１日仕事をしないということが考えられない職種も多かった。乳牛の世話をする農民は毎日搾乳しなくてはならなかったし、農作物の取り入れ時期は日曜日であろうが何であろうが、働かなくてはならなかった。牧師は礼拝で「安息日を破った者に罰が当たった」という

類いの説教をよくしたが、そもそも安息日を破る者は教会にほとんど来ていなかった。

そのような状況の中で父は遠慮なく、安息日を守らない教区民を非難した。その結果、バーミンガムでは彼らから石や泥を投げつけられ、敵対してしまった。このような牧師人生を送っていたので意気喪失して、娘たちの将来について長期的展望を示さないまま、亡くなってしまったのかもしれない。しかし、父は普通だったらしない決断をイザベラに下した。

### 5.3　かわいい子に旅をさせた父

「かわいい子には旅をさせよ」ということわざには、「子どもには苦労をさせなくてはいけない」という従来の意味と、「子どもがかわいいなら、金を出して旅をさせてやれ」という誤用の意味があるそうだ。1854 年、イザベラが 22 歳の時に父が許した初めてのアメリカ旅行には、まさにその二つの意味があった。それは体調を崩した若い娘に当時の医者が下すお決まりの提案、「転地療養」案から始まった。当時のアメリカはまだ充分に荒々しさを残した開拓途上の国である。これが旅行家イザベラ・バードの誕生につながる。

### 5.4　バードに見られる「牧師の娘」の片鱗（初来日時時点）

1858 年、イザベラが 27 歳の時に父が亡くなり、残された家族は牧師館を出なければならなかった。イザベラはその時から「牧師の娘」ではなくなったが、72 歳で亡くなるまで、彼女は「牧師の娘」的な部分を保っていた。

バードの初来日は父の死から 20 年後だが、『日本奥地紀行』の本の中にもその片鱗が見られる。まず、第一の例だが、ことあるごとにバードの口から、その場にあった聖書の一文が口をついて出てくることだ。日曜学校の「お嬢さん先生」の経験のたまものだろうか。第二は、自然に感動したときの、迫力あるバードの文章だ。彼女のこのような文章は、牧師が宗教的陶酔に浸って、たたみかけるように強い調子で語る説教に似ている。彼女は幼いときから父だけでなく、さまざまな牧師の説教を聞くことがあったはずだ。自然にそのリズムがバードの体内に入っているのであろう。第三には、階級の上から下までまんべんなく人に接し、その家を訪ねる機会があったことが、観察

眼を養い、それが旅行の時も活かされていることだ。そして第四は、長い間独身だったバードが、旅行で出会った子どもを嫌がらず、子どもの存在に慣れていることである。日曜学校で小さい子どもを扱ってきたからだろうか。

## おわりに

バードは海外の旅を通じて、女性がすべきではないことを海外でするという方法にめざめた。彼女は西洋人の人目がなければ、遠慮なく馬にまたがって乗り、政治・経済面についても現地の男性の西洋人たちに対して臆することなく話題にした。そして英国にいるときは元通り、リスペクタブルで、多くの人に親しみと謙虚さを持って人に接する「元牧師の娘」になった。それはバードにとって自然な行動だった。このように二面性を使い分けた結果、彼女は「出る杭は打たれる」存在から「出すぎた杭は打たれない」存在になったのである。

バードは自分の海外での行動を、友人や若い娘に勧めたりはしなかったので、リスペクタブルな女性たちから敵視はされなかった。そして彼女にとって幸いなことに、英国には元々、奇抜な人の存在を容認する文化があった。これは当然、男性にのみ認められる特権だったが、バードはかろうじてその仲間に入れてもらうことができた。

バードは家族愛が強い人で、そのために旅行に出かけられない時期がかなりあった。彼女の人生はキャリアの面から考えると、真っ直ぐな道ではないし、一途に一つの方向に向かって突き進んだ人生でもなかった。しかし、「人生を貫いたもの」が一つあるので、生涯にわたって、旅を続けることができた。「人生を貫いたもの」とは、自分中心であることだ。バードは、旅をしているときの自分が好きで、旅をしているときはそのまま旅を続行することを第一義としていた。旅行先で社会的弱者の抱える問題を見聞きしても、宣教師のようにその場所に腰を落ち着けて改良しようとはせず、著書に書き残していくだけだった。そうしなければ、旅人でなくなってしまうからである。

しかし、バードもやはりビートン夫人の目指す「自分自身ができる慈善」を探して試行錯誤し続けていたのである。30 代の時に行った英国の貧民街の調査や、貧困に苦しむ人々をカナダに移住させる試みなどは、彼女に完全な達成感はもたらさなかった。そして彼女は晩年に至って、家族から受け継いだ遺産、自分の著作から得た収入を、亡き夫と両親、妹の名を冠した病院・孤児院建設に注ぎ込んだ。場所は中国、韓国、日本である。後輩を育てることや、一か所でじっくり物事に取り組むことはバードが生来苦手としてきたことだが、各地の宣教団の協力を得て事業が成立した。これは牧師の娘として父に誇れる行いであり、彼女はまた、一人のキリスト教信者としても満足して人生を閉じたのである。

**註**

1）当時は家政書が数多く出版されていた。この本は数種類のタイトルで知られているが、妹島治彦の選択に従った。（妹島 2018　p.11 ～ 12）

2）当時の庶民は数少ない手持ちの衣服や靴下をかがったり、繕ったりして使用し続けた。これは妻と多少大きくなった少女の仕事だった。

**参考文献**

奥田潤　2016「近代イギリスの流行売薬の処方」『薬史学雑誌』52　日本薬史学会

金坂清則　2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社

川端有子　2019『図説　ヴィクトリア朝の女性と暮らし　ワーキング・クラスの人々』河出書房新社

川本静子　1996「清く正しく優しく――手引き書の中の〈家庭の天使〉像」『英国文化の世紀 3　女王陛下の時代』松村昌家他編　研究社出版

倉持晴美　1999「十九世紀イギリス小説に見る女性の自立」『イギリス学への招待―共立女子大学・共立女子短期大学公開講座』入江和生他 明現社

小檜山ルイ　1992『アメリカ婦人宣教師　来日の背景とその影響』東京大学出版会

坂井妙子　2019『メイド服とレインコート』勁草書房
指昭博編著　1996『生活文化のイギリス史』同文館出版
妹島治彦　2018『「ビートン社の家政書」とその時代――「幸せの形」を求めて」京都大学学術出版会
チェックランド、オリーヴ　1995『イザベラ・バード　旅の生涯』日本経済評論社
東田雅博　2004『纏足の発見――ある英国女性と清末の中国』大修館書店
遠山茂樹　2002『森と庭園の英国史』文藝春秋
中田元子　2019『乳母の文化史　19 世紀イギリス社会に関する一考察』人文書院
バー、パット　2013『イザベラ・バード　旅に生きた英国婦人』小野崎晶裕訳　講談社
バード、イザベラ　2012 ～ 2013『完訳　日本奥地紀行』第 1 ～ 4 巻　金坂清則訳注　平凡社
林望「ビートン夫人の教え」（2022.08.06 閲覧）
http://www.nttpub.co.jp/webnttpub/contents/beeton/index.html
ブロディ、J.S　1999「奇抜と創造性」『イギリス学への招待―共立女子大学・共立女子短期大学公開講座』入江和生他 明現社
山口昌子・梅垣千尋・長谷川貴彦　2019『家族の命運』名古屋大学出版会
山口みどり　2006「牧師館の変容―19 世紀英国国教会の改革・建物・『家族企業』」『史観』155　早稲田大学
山口みどり　2013「ヴィクトリア期英国国教会聖職者の娘たち : 宗教・ジェンダー・アイデンティティ」『大東文化大学法学研究所報』33　大東文化大学法学研究所
山口みどり　2013「教区のアイドルから教区の女王へ　――英国国教会牧師館の女性たち」『欲　　ばりな女たち―近現代イギリス女性史論集』伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子　彩流社
Beeton,Isabella　1861“The book of Household　Management”
https://www.gutenberg.org/cache/epub/10136/pg10136.html
（2022.08.05 閲覧）

Bird, Isabella L. 1880 “Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé” vol.1,2 John Murray,London

Hughes,Kathryn 2005“The Short Life & Long Time of Mrs.Beeton ”Fourth Estate

Office for National Statistics（ONS）
https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/birthsdeathsandmarriages/livebirths/bulletins/babynamesenglandandwales/2020　（2022.07.30 閲覧）